カンボジアプロジェクト完了報告

カンボジアに送付した 90 台の車椅子の引き渡し式が 2017 年 2 月 1 日にカンボジア、プノンペンの障害者支援センター（DAC）で行われた。
カンボジアには今回で 6 度目の寄贈で寄贈総数は 580 台となった。

当会からは小田謙介理事と、当会の活動に継続的に参加をしている相模女子大学チームから小泉京美准教授と 11 名の学生がプノンペンとシェムリアップを訪問した。

2 月 1 日　午前中　：　引き渡し式

式にはカンボジア社会福祉省のヴァン・ソース大臣、障害者支援センターのエム・チャン・マカラ代表と幹部、日本大使館の鴨志田尚昭参事官、JICA 幹部と車椅子を受け取った子ども達 30 名と家族、その他関係者、合計約 150 名が出席した。
無償運賃を提供してくれた商船三井（MOL）のカンボジアのシニアアドバイザーのスキット・ルンピパット氏の出席もあった。また、最近ベトナムに帰国したグエン・ヒュー・ロンさんも駆けつけてくれた。

全員起立してのカンボジア国歌が流れて式が始まり、DAC 代表のマカラ氏、当会の小田理事、日本大使館の鴨志田参事官、最後にヴァン・ソーサ大臣のスピーチで式は終わり、車椅子に乗った子ども達が家族と一緒に主な出席者の前を触れ合いながら移動して行き、スケジュールが終了した。

スピーチの内容は、日本からの車椅子の寄贈に関しての感謝の言葉が述べられていたが、特筆することは、DAC のマカラ氏がこれまでに寄贈された年度と台数、それに当会から直前に連絡をした日本でかかった費用に関して言及をしたことである。それだけの費用をかけて日本が無償でカンボジアに送ってくれたことへの感謝と、加えて前日の会議の内容を盛り込んだ車椅子の種類（外出用、戸内用とウォーカーなど）をあげ、修理をして使用するべきことなど具体的に言及したこと。

2 月 1 日午後　：　施設訪問

LAVALLA SCHOOL　（MARIST OLIDARITY CAMBODIA）

100 名の小学生別施設を含めて合計 190 名の小学生が通っている。
今回車椅子 10 台とウォーカー2 台を受け取る。これまでは 9 台受け取っている。

この学校は障害児に小学校教育全般を提供している唯一の政府公認の学校であり、英語やクメール伝統音楽や初級コンピュータなどもカリキュラムに加えている。また、校内プールでは理学療法を行っている。

我々のバスが到着すると、大勢の子ども達が集まってきて笑顔満載。数人で相模チームの学生たちの手を取り、広場へ案内。広場で学生たちが自己紹介をすると、一人一人の名前を大きな声で一斉に繰り返す。学生達との交流がしばらく続き、先生の指示で一斉に教室での授業に戻る。

その後、先生たちから車椅子の寄贈と我々の訪問への感謝の言葉を聞き、学生代表からも子ども達との触れ合いが嬉しい経験であったことも伝える。

学校を離れる途中で英語の授業をしているクラスに立ち寄り、校長から車椅子を使っている英語教師のために電動車椅子があればありがたいと聞く。もう一人の教師もいるので出来れば 2 台、と。

HHC (HANDS OF HOPE COMMUNITY)

身体並びに知的障害を持つ子ども達と家族を支援している施設。現在約 60 名の子ども達を受け入れている。前回車椅子を 5 台受け取り、今回も同様に 5 台。施設内を丁寧に案内してくれた創立者でエグゼクティブ・ダイレクターのチャン・サリン氏によるとあと 10 台は今でもほしい、と言われた。

チャン・サリン氏は来日経験もあり彼自身足が少し不自由だが、活動的であり、自ら施設内を丁寧に案内してくれ、絵の教室などでは大学生と子どもたちの交流。
音楽教室では大学生の一人も民族楽器の太鼓を手に即興演奏を披露。

2月2日　：　施設と子どもの自宅訪問

KIEN KHULEANG PHYSICAL REHABILITATION CENTER

800名以上の障害者が登録している大きなリハビリ施設。専門の理学療法士による治療を受けるために子ども達が訪れている。これまでに32台の車椅子を受け取っているが、今回の配布は無し。今後も当会からの寄贈への要望はないと考えられる。

その理由の一つは、同センターでは車椅子の製造を行っている。日本の子ども用車椅子に比べると簡単なスペックだが、大人用と子ども用のサイズに区別して製造をしている。
平均で毎月50台の車椅子を障害者4名を含む8名の職員で製造している。補装具の製造もおこなっており、平均20足を3名の障害者を含む10名が従事している。

もう一つの理由は当会の問題。
前回受け取ったが、利用者が見つからずに長く放置されているソファ型の椅子があった。キャスターもついていないし、受け取っても活用できないのであれば必要なし、の意見は正しい。「必要な車椅子を必要なところに送る」重要性を痛感。

NATIONAL BOREI FOR INFANTS AND CHILDREN

ここは DAC もその一組織である社会福祉省の Department of Child Welfare　の施設であり、公的施設。従って、53 名の職員の内 29 名が公務員であり、24 名は契約職員。

115 名の身寄りのない人たちの支援をしており、そのうち 19 人は HIV 患者。年齢は 1 歳から 36 歳で、そのうち 15 歳以下は 87 名。

ダイレクターの Mrs. Thor Peou に最初に案内された部屋はまだ赤ん坊と言える幼児が 10 名ほどそれぞれのベッドで言葉や泣き声もなく静かに横たわっている姿を見ながら施設の説明を聞く。生まれ落ちた瞬間からすでに身寄りを失った子ども達の境遇の話を聞くと訪問者の我々も厳粛な気持ちになり、ただ静かに説明に耳を傾けるのみ。
その後、車椅子に座って職員の手を借りて食事をしている子ども達の部屋を訪れたが同様にただ静かにその様子を眼にするばかりであり、カメラを向けることは出来なかった。

前日訪問した LAVALLIA SCHOOL で経験した子どもたちの明るさとはまったく好対照の子ども達の現実。

車椅子は 2013 年に 3 台を受け取っており、今回は 21 台。丁度受け取ったばかりで玄関に保管されていた。あと何台足りないかの質問へのダイレクターの即答は 50 台以上欲しい。

子ども自宅訪問

最初に、**CAMBODIA TRUST REHABILITATION CENTER** を訪問。同センターの PT (理学療法士)リーダーの Ms. Silon の案内で二人の子どもの自宅を訪問した。

Pum Charkriya　　11 歳　　女児

2015 年に受け取った車椅子を大いに活用して生活の幅を広げている。
叔父さん（左端の男性）が技術者で故障をしても修理できる環境である。

Pen Vibol　　4 歳　男児

訪問時にはハンモックで昼寝中。家族に話を聞いているうちに目を覚まさせてしまった。
木製の姿勢矯正用の車椅子を室内で使用し、外出時はバギータイプ（当会からではない）を使用して使い分けている。そのため、室内用車椅子には損傷はない。
また、彼は補装具を使用しており、車椅子と組み合わせて生活の範囲を広げている。
カンボジアで補装具が使われている実例。

2月3日　：　シェムリアップ　リハビリテーションセンター

プノンペンからシェムリアップに移動して空港からリハビリテーションセンターに直行。
同センターでは2005年に贈呈式を行った。
700人を超える子ども達の支援をしており、今回は20台。これまでの36台を加えても必要な台数にははるかに及ばない。
所長に、「90台受け取ったらどうでしょうか？」と質問をしたら、遠くで生活している子ども達への配布と成長してサイズが合わなくなった子ども達への乗り換え用として充分に活用できる、との返事。

大使館の事後調査でもこのセンターは日本からの車椅子の有効性を充分に認識しているコメントがあり、所長の言葉は地域の実情を的確にとらえたうえでの発言である。
センターは11時半から2時まで昼休みで、我々の到着時には子どもの姿は無かったが、プノンペンのDACから所長に連絡を取ってくれており、2時には二人の子どもがセンターに来てくれるべくアレンジをしてくれていた。

2時に前回車椅子を受け取った二人の女児が家族とセンターに来てくれた。
Sre Kong　12歳　女児

小田理事は彼女の事をよく覚えており、2年ぶりの嬉しい再会。印象的だったのは母親が常に笑顔で我々に対してくれた。このことは車椅子が彼女と家族の生活に貢献をしていることの表れだと感じた。ただ、成長した彼女にとって車椅子が少し窮屈になってきた、とのこと。代替えが必要になってくるが、サイズがあるものが見つかるか、が懸念。前述の所長の言葉にあった代替えの必要性は現実であり、どう対応できるか、が今後の現実的な課題。

Chan Pisey　　15 歳　　女児

活発に大学生とのふれあいを楽しんでいた Sre Kong に対して彼女は物静かにしていた。父親と一緒に訪れてくれたが、父親がしっかりと車椅子の保守管理をしてくれていると聞き、車椅子が彼女の家族にとって欠かすことができない存在であることを確認できた。

車椅子を使っている子ども達自身がその気持ちを表すことはなかなか難しいが、常に家族の表情や言葉から我々が送っている車椅子がどのように家族の生活を支えているのか、が理解できる。

義肢装具製造

同センターは多くの種類の義肢装具を製造しており、必要な人たちはシェムリアップ近郊だけでなく、遠方からも訪れている。
義足などの完成と使用になれるためには１～２週間と必要だが、その人たちが無料で宿泊する施設も備えている。

子ども達

贈呈式で出会った子ども達の写真。子どもたちの表情で彼らの気持が充分に表れている。